

14『ジャングル・ジャンクション女版』成井豊＋真柴あずき（原作／高橋いさを）

○ジャンル／ファンタジー

○ストーリー／OLとサラリーマンの出会いを描いたラブストーリー、刑事と脱獄囚の攻防を描いたサスペンスドラマ、改造人間と世界制服を企む悪の帝王の戦いを描いたSFアクション。出会はずの三つの物語の登場人物たちが、なぜか東京のど真ん中で出会ってしまった！「ここにみんなで続きを考えて、一つの物語を作ってあげたいのよ！」合計9人の登場人物たちが団結して、新たな物語が始まった！はたして9人はそれぞれのハッピーエンドに辿り着くことができるだろうか？ やっぱ無理？

○出演者／男1＋女8＝計9  
○上演時間／100分

登場人物

メグミ

（OL）

オオニタ

（サラリーマン）

オザキ

（刑事）

スズキ

（刑事）

カンドリ

（脱走犯）

キョウコ

（改造人間）

ブルーナイト

（悪者）

タカコ

（キョウコの妹）

シンド博士

（キョウコの母）

オザキが現れる。車に乗り、エンジンをかける。バイクにまたがり、エンジンをかける。メグミが現れる。電車に乗り、吊り革に手をかける。

オザキ  
（勢いよくカーブを曲がる）  
メグミ  
（勢いよくカーブを曲がる）  
オザキ  
（電車がカーブしてよろめく）  
メグミ  
（前の車を追い抜く）  
オザキ  
（前の車を次々と追い抜いていく）  
メグミ  
（お尻を触られて怒る）  
オザキ  
（道路のデコボコでガタガタ揺れる）  
メグミ  
（道路のデコボコでガタガタ揺れる）  
オザキ  
（電車を降りて歩き出す）  
メグミ  
（信号で急停車する）  
オザキ  
（信号で急停車する）  
メグミ  
（自転車で急停車する）  
オザキ  
（自転車で急停車する）  
メグミ  
（イライラしている）  
オザキ  
（イライラしている）  
メグミ  
（二人を悠々と追い抜いていく）

オザキとキヨウコが消える。

そこへ、オオニタがやってくる。楽しそうに買い物をしている。両手がいっぱいになるまで買い物をして、店を出る。メグミが角を曲がる。オオニタも、反対側から同じ角を曲がる。

メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ

あっ！  
うわっ！

キキーン！（とブレーキをかけて）ガシヤン！（と転倒する）

ドワーン！（と荷物を放り出して引っくり返る）

…痛い。

（飛び散った品物を見て）あーっ！

もう、どこ見て歩いてるの？

動かないで！

えっ？

お願いだから、ジツとしてて。

何でよ。

君のお尻の下に――

私のお尻の下に？

玉子のパックがあるんだ。

メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ

玉子？

だから動かないで！ どこにも力をかけないで。

そんなこと言われても……、どうすればいいの？

ゆっくり、そーっと起きて。

そーっと？（と慎重に体を起こす）

そーっと。（と玉子のパックを取り出す）

どう？

（玉子をかめて）ダメ。これもダメ。これもこれもダメ。

全滅？

（玉子を一個だけ持ち上げる）

よかった。生存者一名だね。

何が生存者一名だ。（と周囲を見回して）ほら、見ろよ。全部バラバラじ

やないか。（と他の品物を集め始める）

何よ。私が悪いって言うの？ いきなり飛び出してきたのは、あなたの方

じゃない。

今日は僕の誕生日なんだ。せつかく一人でお祝いしようと思ってたのに。

一人で？

仕方ないだろう？ 他に誰も祝ってくれる人がいないんだから。（と泣き

出す）

もう、男のくせに泣くな！（とオオニタに歩み寄る）

（メグミの足元を指さして）そこ！ スパゲティ、踏んでる！

あ、ごめんなさい！（と避けて）痛い。（と足首を押さえる）

（スパゲティを取って）あーあ、せつかくカルボナーラを作ろうと思った

メグミ

オオニタ

メグミ

オオニタ

メグミ

オオニタ

メグミ

オオニタ

メグミ

オオニタ

メグミ

オオニタ

メグミ

オオニタ

メグミ

オオニタ

メグミ

オオニタ

メグミ

オオニタ

のに。

ねえ、いい加減にしてくれない？ 男のくせにグジグジグジグジ。確かに私も悪かった。でも、あなただってちゃんと前を見てなかったでしょう？

(とオオニタに歩み寄る)

(メグミの足元を指さして) そこ！ セロリ、踏んでる！

ごめんなさい！ (と避けて) 痛い。 (と座り込む)

どうかした？

足首、ひねっちゃったみたい。

大丈夫？

大したことないよ。私のことはいいから、もう行けば？

(荷物をメグミに差し出して) これ、持ってて。

何だよ。

いいから。(と荷物を押しつけ、自転車を起こして) よかった。どこも壊

れてない。はい、ありがとう。(と荷物を受け取りカゴに入れる)

ねえ、どうするつもり？

家まで送るよ。僕が運転するから、後ろに乗って。(とメグミの手を取っ

て、立ち上がらせる)

これが彼との出会いだった。男と女の出会いにもいろいろあるけど、会社

の同僚だったとか、バイト先で知り合ったとか、そんなありきたりな出会

いとはわけが違う。これだけステキな出会いをってしまったら、もう恋に

落ちるしかない。

好きだ。

私も。……というふうに展開してもいいんだけど、それでは簡単すぎて

オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ

つまらない。これは、都会に生きる男の女の愛を、繊細なタッチで描き出す、ラブ・ストーリーなんだから。

さあ、後ろに乗って。(と自転車に乗ってハンドルをつかむ)  
本当にいいの？

悪いのは、僕の方だから。  
ありがたい。(と自転車の荷台に乗る)

行くよ。ふんっ！ ふんっ！ (とペダルをこぐ)  
私、そんなに重い？

全然。ふんっ！ (とこごと、自転車が走り始める)  
私の名前は、クドウメグミ。商事会社に勤める、普通のOLだ。

ねえ。

何？  
君、この物語の主人公だよね？

えっ、わかる？  
だって、モノローグをしゃべるのは主人公だけだから。

照れくさいけど、実はそうなんだ。  
照れることないよ。ドラマの主人公っていうのは、普通の人なら恥ずかしくて言えないようなことを、ドンドン言っつて構わないんだ。

あ、信号！  
キキーン！ (と止まる)

もう、ちゃんと前を見てよ。  
大丈夫大丈夫。主人公を事故で死なせるわけないだろう？

あ、そうか。





メグミ

バカね。これは現実じゃないんだよ。きつとまた、信じられないような偶然が重なって、素敵な再会ができるよ。

オオニタ

あ、そうか。

メグミ

そうそう。何たって、ラブ・ストーリーなんだから。

オオニタ

ふつつかな相手役ですけど、よろしく。

メグミ

こちらこそ。じゃ、またね。

オオニタ

またね。

メグミとオオニタが別々の方向へ去る。

オザキとスズキがやってくる。オザキは運転席に乗り、スズキは助手席に乗る。車が走り出す。オザキは無線機で話をする。スズキは拳銃を出して弾丸を確認する。

拳銃、撃ったことある？

いいえ、まだ。

撃つてみたい？

はい。

バカ！ 撃ちたい気持ちにはわかるけど、ギリギリまで我慢しなさい。

わかっています。いくら凶悪犯と言ったって、相手は人間なんですよね。

そうよ。親もいれば、兄弟もいる。

犬も飼ってるかもしれないね。

バカ！ 私たちは見通りの者だけど、見てわからなかったら困るので

説明する。私たちは刑事だ。スズキ。

何ですか、オザキさん。

オザキだ。私たちは三日前、囚人護送車から脱走した殺人犯、カンドリシ

ノブを追っていた。そのカンドリを逮捕したのは、他でもないこの私だ。

私の回想。

オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ

そこへ、カンドリが走ってくる。

カンドリ

スズキ

オザキ

カンドリ

スズキ

カンドリ

オザキ

カンドリ

オザキ

スズキ

カンドリ

スズキ

カンドリ

オザキ

カンドリ

(振り返って) よし、ここまで来れば、もう安心だ。

(車を降りて) オザキさん！ カカカカンドリです！

(車を降りて) バカ！ あれは私の回想の中のカンドリよ。カンドリ！ (と拳銃を構えて) 殺人容疑で逮捕する！

何を言ってるんですか、刑事さん。私に人が殺せるわけないでしょう？

嘘つけ！ 証拠は挙がってるんだ！

証拠って？

おまえは暴力団の組員と同棲していた。その組員が仕事をしくじって、東京湾に沈められると、頭に来たおまえは組事務所を殴り込みをかけた、組長他二名を金属バットで叩き殺した。証拠は金属バットについていた、おまえの指紋だ。

向こうは拳銃を持ってたんだ。正当防衛ですよ。

それは嘘だ。三人が手にしていたのは、爪楊枝だった。三人はおやつのため

こ焼きを食べている真ん中に襲われたんだ。

(カンドリに) どうして殴り込みなんかしたの。

あいづらは、私のタツヤをドラム缶に入れて、コンクリートを流し込んで、三日ほど天日で干して、海に沈めたのよ。タツヤは泳げないのに。気持ち悪くなるけど、もし泳げたとしても、助からなかったと思う。

(スズキの首にナイフを突きつけて) 来るな！

スズキ！

来たら、この小娘の命はないよ。

スズキ  
オザキ  
カンドリ  
オザキ  
カンドリ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
カンドリ  
オザキ  
カンドリ  
オザキ  
カンドリ  
オザキ  
カンドリ

小娘じゃない！ 刑事だ！  
とうとう正体を現わしたな。カンドリ、落ち着いて考えなさい。おまえは  
まだ、三人しか殺してないのよ。  
三人しか、じゃない。三人も。  
それが一体どうしたって言うの。私なんか、犯人を十人も射殺してるのよ。  
さあ、もう恐くないわね。（とカンドリに歩み寄ろうとする）  
来るな、人殺し！  
人殺しはおまえの方だろうが！ もういい。そんなに殺したいなら、殺し  
なさい。三人が四人になったって、大した違いはない。  
いいの？ 本当に殺すよ？  
ちよつと待って。スズキ、短いつきあいだったけど、さんざんお世話した  
よね。お礼を言つて。  
ありがとうございます。  
あ、それからこの前貸した一万円、あんたが死んだら、財布から抜いとく  
けど、いいかな？  
はい。長い間、すいませんでした。  
（カンドリに）胸は刺さないでね。お財布が血で汚れちゃうから。  
（スズキに）あんた、ひどい上司を持ったね。  
何言ってるの。刑事っていうのは、殉職して初めて一人前になるのよ。さ  
あ、グズグズしてないで、スパッとやりなさい、スパッと。  
バカにしやがって！（とナイフを振り上げる）  
ドキュン！（と拳銃を撃つ）  
うっ！（と腕を押さえる）

オザキ  
カンドリ  
カンドリ  
カンドリ  
オザキ  
カンドリ  
カンドリ  
カンドリ  
オザキ

カンドリシノブ。神妙にお縄を頂戴しろ。(と手錠をかける)  
放せ！ 放せよ！  
ジタバタするな！ お上にも慈悲つてものがある。(と牢に入れる)  
今に見てる。必ず復讐してやるからな。  
はい、回想終了。(と車に戻る)

カンドリが消える。と思ったら、すぐにマイクを持って現れる。

カンドリ  
オザキ  
カンドリ  
カンドリ  
カンドリ  
カンドリ  
カンドリ  
オザキ  
オザキ  
オザキ  
オザキ  
オザキ

(マイクに向かって) 覚えとけよ。必ず……。うー……。(と頭を抱える)  
(エコーがかかって) 必ず必ず必ず……。オザキさん。  
必ず必ず……。  
どうしたんですか、オザキさん！  
ハッ！(と我に返って) いや、何でもない。

カンドリが消える。

スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
スズキ  
スズキ  
スズキ  
スズキ

顔色、悪いですよ。運転、代わりまししょうか？  
カンドリは護送車から脱走した時、警察官から拳銃を奪っている。  
ええ、知ってます。  
今のはあんたに言ったんじゃないの。ナレーションで状況を説明したの。  
あ、すみません。

オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ

拳銃を奪われた警察官は、ナイフで首を切り裂かれて重体だ。いくら登場しないキャラクターとは言っても、きっと痛かったに違いない。

ピーピーピー。(と無線機のマネ)

(マイクを取って) はい、オザキです。

「カンドリシノブに拳銃を奪われ、重傷を負わされた警察官が、先程、出血多量で死亡しました」

…：了解。(と切る)

オザキさん。

奪われた拳銃には、弾丸が六発入っているはず。

ということは、あと六人殺せるってことですね？

バカ！ その前に、私たちが逮捕するのよ。ただし、万一、カンドリが撃つてきても、すぐには撃ち返さないこと。

わかっています。一発でも多く撃たせるんですね。

さあ、着いた。(と車を止める)

いよいよですね。

くどいようだけど、拳銃は最後の手段よ。

人命第一。これが、刑事ドラマの建て前ですよね。

私は主人公だから、死ぬ心配はないけど、あんたは違う。気をつけないと、すぐに殺される。

がんばります。

よし。じゃ、行こうか。(と車を降りる)

はい。(と車を降りる)

オザキとスズキが去る。

キョウコがやってくる。バイクにまたがり、走り出す。

キョウコ

その日、私はムシヤクシヤしていた。それもこれも、キムチ牛井のせいだ。私の名前はイノウエキョウコ。一応、エアロビのインストラクターだが、インストラクターでもキムチ牛井は食べる。それは、相撲取りがビッグマツクを食べると同じだ。私は誰が何と言おうと、キムチ牛井が好きだ。一日一回は食べないと気が済まない。その日もいつものように、なじみのすき家に向かったが、あろうことか、店は潰れていた。すき家が簡単に潰れるな！私は心の中でそう叫び、仕方なく他のすき家を探しに出かけた。隣の町まで走って、やっとすき家の看板を発見したが、私の走っている道は、車線変更ができなかった。クソッ！私はなおもバイクを走らせていた。しかし、すき家はなかなか見つからない。辺りはすっかり暗くなり、雨さえ降ってきた。あと十分だけ走ってみようと思いつき、私はさらにスピードを上げた。その時、対向車のヘッドライトが、私の目に突き刺さった。私はボンヤリして、いつの間にか右車線を走っていたのだ。慌ててハンドルを切ったその瞬間、雨でタイヤがスリップするのわかった。すべてがスローモーションになり、私はゆっくりと地面に叩きつけられていった。



ゆっくりと暗くなる。

キヨウコ

それからどのくらい時間が過ぎたのかわからない。目が覚めてみると、私は、信じられない状況に置かれていた。

明るくなる。キヨウコは何か固定されていて動けない。すぐそばに、タカコが立っている。

タカコ

キヨウコ

タカコ

キヨウコ

タカコ

キヨウコ

タカコ

キヨウコ

タカコ

キヨウコ

タカコ

キヨウコ

あ、目を開けた。

ここはどこ？ あなたは誰？

口をきいた。ちゃんと日本語をしゃべった。バンザーイ！バンザーイ！

バンザーイはいいから、私の質問に答えてよ。

（インターホンに向かって）博士、おめでとうございます！ クランケが

意識を回復しました！

クランケ？ ということは、ここは病院なの？

まあまあ、そんなに慌てないで。（とキヨウコの脈を計る）

慌ててるのは、あなたの方でしょう？

私はいいの。私は今、猛烈に感動してるんだから。

何が何だか、全然わからない。

いいからいいから。博士が来たら、一から十まで説明してくれる。

博士って、誰よ。

そこへ、シンド博士がやってくる。

シンド博士

私よ。ロボット工学の世界的権威、シンド博士とは私のことよ。

キョウコ

また変なのが出てきた。

シンド博士

(タカコに) もういいわ。外してあげて。

タカコ

はい。(とスイッチを押す)

キョウコ

(手足が自由になつて) あなたがここの責任者？

シンド博士

その通り。さあさあ、あなたの知りたいことを一から十まで説明してあげようじゃないの。

タカコ

(キョウコに) あなたにとっては、かなりショックな内容かもしれないけど、心の準備はいい？

キョウコ

(深呼吸して) ……いいよ。

シンド博士

一週間前の午前零時、あなたはバイクで事故を起こした。

タカコ

手足はバラバラ、内臓はグチャグチャ。はっきり言って、生きているのが不思議なくらいだった。

キョウコ

ちよつと待つてよ！ そんな大怪我をしたのに、どうして今はピンピンしてるわけ？

シンド博士

なぜだと思う？(と笑う)

キョウコ

いやな予感。まさか、私の体に何かしたんじゃないでしょうね？

シンド博士

その通り。私は、あなたの命を助けるために、あなたの体の一部を機械と交換した。つまり、あなたは改造人間として蘇ったの。

キョウコ

ガン！

タカコ

あなたの腕は岩をも砕き――

キヨウコ

タカコ

キヨウコ

タカコ

キヨウコ

シンド博士

キヨウコ

タカコ

キヨウコ

シンド博士

キヨウコ

タカコ

キヨウコ

シンド博士

キヨウコ

シンド博士

キヨウコ

タカコ

キヨウコ

シンド博士

ドガッ！（と岩を砕く）

あなたの足は弾丸よりも速く走り――

ヒュン！（と走る）

あなたの耳は百キロ先のカエルと象の鳴き声を聞き分ける。

ケロケロ。パオーッ。象はこつち。（と指さす）

どう？ 改造人間として蘇った感想は？

どうして普通の体に戻してくれなかったの。

わかっているよ。あなたは世界で初めての改造人間なの。改造人間第一号

なんだよ。

そんなの、ちっともうれしくない。

自分に与えられた使命の重さに胸がいつぱいなね。

使命って何よ。

決まってるでしょう。世界の平和を守るんだよ。

世界の平和？ そんなもの、どうして私が守らなくちゃいけないんだ。

あなたもこの物語の主人公なら、ブルーナイトのことは知ってるわね？

知らないわけじゃないでしょう？ 私の両親と妹はブルーナイトに殺されたんだから。

ブルーナイトに勝てるのは、人間の力をはるかに超えた、改造人間だけなのよ。

それがどうして私じゃなくちゃいけないの。

まだわからないの、姉さん。

今、何て言った？

やめなさい、タカコ。

タカコ

もう黙っていられます。(キヨウコに) 姉さん。あなたは私の姉さんなんだよ。

キヨウコ

嘘をつくな。私の妹のタカコはこんな顔じゃない。

タカコ

この顔はブルーナイトに整形されたの。でも、これ、免許証。(と免許証を差し出す)

キヨウコ

(読む)「イノウエタカコ」。名前も生年月日も、妹のタカコと同じだった。ガーン!

タカコ

私はブルーナイトに殺されたんじゃない。誘拐されたの。父さんと母さんと一緒に。

キヨウコ

それじゃ、私の父さんと母さんはまだ生きてるの?

タカコ

父さんは去年亡くなった。でも、私と母さんは逃げてきた。ブルーナイトを倒すために。

キヨウコ

ということは、この人は。(とシンド博士を見る)

シンド博士

キヨウコ。(と両腕を広げて) 母さんだよ。

シンド博士

ガーン! ……シヨックだった。しかし、事実は事実だ。黙って受け入れるしかない。母さん!

キヨウコ

キヨウコ!

タカコ

タカコ!

キヨウコ

姉さん!

シンド博士

ブルーナイトは、私が必ずこの手で倒してみせます。

キヨウコ

頼んだよ、キヨウコ。いや、バイオニック・キヨウコ。

ブルーナイト

それで、ブルーナイトは今、どこにいるんですか?

ブルーナイト

ブワッハッハッハ!

キョウコ

誰だ！

ブルーナイトが現れる。

ブルーナイト お待たせしました。地獄のクイーン、ブルーナイト！（ポーズつき）

キョウコ さすが悪役、絶妙のタイミニングで登場したな。

ブルーナイト 待ちくたびれたぞ、バイオニック・キョウコ。おまえが作り出されないことには、私はただの変な人だ。ブワツハツハツハ！

タカコ もう大丈夫だよ。これからは、姉さんが付き合っただけだから。

ブルーナイト 頼むよ、ホント。ブルー・フィンガー！（とタカコを引き寄せる）

シンド博士

キョウコ タカコを放せ！

ブルーナイト ハイよ。（と放す）

キョウコ おいおい。

ブルーナイト 何だ、そのまぬけ面は。私がこいつをさらわないと、話が先に進まないもんな。どうする、さらってほしいか？

ブルーナイト さらってほしいんだらう？

ブルーナイト さらってくださいますか？

ブルーナイト クソ……、夕御飯にしようか。

キョウコ そうね。

シンド博士 今日は、なんとマツタケごはんです！

タカコ わあ、凄い。（とブルーナイトを見て）あれ、あの人、何だらう。

キョウコ 大人のくせに変な格好して、バツカみたい。（と笑う）

ブルーナイト ごめん。私が悪かった。あなたたちあつての私、私あつてのあなたたち。

反省するから、変な人扱いだけはやめてください。  
わかればいいんだ。タカコを放せ！  
（タカコを引き寄せ）ブワッハッハッハ！ イヤだよーん。  
バイオニック・キョウコ、戦いなさい！  
はい。ブルーナイト、もうおまえの好きにはさせないぞ。  
やるか。  
うっ！  
姉さん！  
胸が……。胸が苦しい！  
しまった、こんな時に。  
ブワッハッハッハ！ この勝負、お預けにしてやろう。再会を楽しみにしているぞ、バイオニック・キョウコ。さらばだ。

ブルーナイトがタカコを連れて去る。

そこへ、メグミがやってくる。

メグミ

キョウコ

シンド博士

メグミ

シンド博士

メグミ

キョウコ

メグミ

シンド博士

メグミ

シンド博士

キョウコ

あの、すいません。

胸が、胸が張り裂けそうだ！

バイオニック・キョウコ、すっかりして！

お取り込み中、すいません。ちよつと聞きたいことがあるんですけど。

何よ、あなた。

あなたたちこそ、ここで何をしてるんですか？

見ればわかるでしょう、苦しんでるんだよ。

どこか悪いんですか？ だったら、こんな所で「胸が胸が」って言ってないで、病院へ行った方が。

ご親切はありがたいけど、通行人を相手にしてる暇はないの。さあさあ、

あっちへ行つて。(とメグミを押し)

ちよつと待って。私はこの物語の主人公ですよ。通行人扱いはやめてくだ

さい。

おもしろいことを言う通行人ね。

お嬢さん、ブルーナイトはこのバイオニック・キョウコが必ず倒します。

だから、安心して通り過ぎてください。

メグミ だから、通行人じゃないんだってば！

そこへ、オザキとスズキが飛び出す。

スズキ 動くな！（と拳銃を構える）

オザキ カンドリ！ 神妙にお縄を頂戴しろ！（と拳銃を構える）

メグミ ひやあ、撃たないで！（と両手を挙げる）

キョウコ 何よ、あなたたち。

オザキ おまえたちこそ、ここで何をしてる。

シンド博士 （スズキに）大人のくせに、オモチャのピストルなんか振り回すんじゃないやあ

スズキ りません！

オザキ オモチャじゃない、本物だ！

シンド博士 （シンド博士に）はぐらかさないで、私の質問に答えろ。ここで一体何を

している。

キョウコ それは私の科白だよ。あなたたちこそ、ここへ何しに来たの。

スズキ 生意気な口をきくと、痛い目に遇うぞ。

キョウコ 痛い目？ おもしろい。遇わせてもらおうじゃないの。

スズキ 舐めやがって！（とキョウコの腕をつかむ）

キョウコ （スズキの腕をつかむ）

スズキ 痛い痛い痛い！

シンド博士 （キョウコに）それぐらいにしておきなさい。あんたが本気を出したら、

腕が割り箸になっちゃうわ。

キョウコ （スズキの腕を放す）



スズキ  
オザキ  
キョウコ  
シンド博士  
オザキ  
メグミ

オザキさん、こいつ、物凄い力です！  
見てればわかる。(キョウコに) 貴様、一体何者だ。  
バイオニック・キョウコだ。  
その生みの親だ。  
(メグミに) そのの、ボートとしてる女。あんたは何者。  
クドウメグミ、普通のOLです。悪いことは何もしてません。

そこへ、オオニタが走ってくる。後を追って、カンドリも走ってくる。

カンドリ  
オオニタ  
カンドリ  
メグミ  
カンドリ  
メグミ  
オオニタ  
オザキ  
スズキ  
カンドリ

(オオニタに) お願い、私と一緒に逃げて！  
そんなこと急に言われても困ります。僕にはメグミっていうカワイイ彼女  
がいるんですから。  
どこにいるんだ、そのカワイイ彼女は。私がブツ殺してやる。  
ここにいますよ。  
(メグミを見て) どこにいるんだ、そのカワイイ彼女は。  
(オオニタに) 何よ、この女。  
知らないよ。向こうで、君との再会を待ってたら、いきなり、一緒に逃げ  
てくれる。  
カンドリ。おまえって女は、このクソ忙しい時に。  
よその物語の男を引っかけて、どうするんだよ。  
違いますよ、刑事さん。この男を人質にしたら、話が盛り上がるかなって  
思ったから。

そこへ、ブルーナイトがやってくる。後を追って、タカコもやってくる。

ブルーナイト

オザキ

スズキ

シンド博士

キョウコ

タカコ

ブルーナイト

キョウコ

ブルーナイト

キョウコ

オオニタ

メグミ

オオニタ

メグミ

オオニタ

タカコ

カンドリ

ブワッハッハッハ！ あんまり遅いから、こっちから迎えに来てやったぞ！  
また変なのが出てきた。

もしかして、この女がブルーナイト？

そうよ。この派手な衣裳。いかにも地獄のクイーンで感じでしょう？

（ブルーナイトに）どうして戻ってきたの。これから、あんたのアジトへ

乗り込もうと思ってたのに。

だったら、グズグズしてないで、すぐに来てよ。私が殺されたら、どうす

るの？

（キョウコに）困るよ、バイちゃん。

その呼び方はやめて。

（オザキたちに気づいて）ん？ こいつらは何だ？

それは私が聞きたいよ。

（メグミに）何なの、この人。

ふんっ！（と巨大な岩を持ち上げて）ドガッ！（と砕く）

（オオニタに）改造人間だつて。

あ、なるほど。でもさ、どうして改造人間がラヴ・ストーリーに出てきて、  
岩なんか砕いてるの？

さあ。

さあつて、しっかりしてくれよ。君はこの物語の主人公なんだろう？

ちよつと待ってよ。この物語の主人公は姉さんよ。

え？ 主人公は刑事さんじゃないの？

シシド博士

待ちなさい！ この物語の主人公は、バイオニック・キョウコに決まってるでしょう。

ブルーナイト

そうだそうだ。そうじゃないと困る！

スズキ

証拠はあるのか？

ブルーナイト

証拠？ この改造人間が、この物語の主人公だっという証拠。

スズキ

証拠は……。

ブルーナイト

あるわよ。見せてやりなさい、バイオニック・キョウコ。

シシド博士

でも、わざわざやらなくても——

キョウコ

私たちはわかってるからいいのよ。わかってないこの人たちに、あなたの

シシド博士

実力を思い知らせてやりなさい。

キョウコ

母さんがそこまで言うなら……。（キョウコだけに照明が当たる）私の名

キョウコ

前はイノウエキョウコ。バイクの事故で瀕死の重傷を負ったが、母親のシ

シシド博士

シド博士と、妹のタカコの手によって、改造人間バイオニック・キョウコ

シシド博士

として蘇った。地獄のクイーン、ブルーナイトを倒すために。（照明が元

シシド博士

に戻る）

ブルーナイト

いいぞ、バイちゃん！

タカコ

姉さん、カッコイイ！

シシド博士

よっ、日本一！

スズキ

オザキさん。

カンドリ

私たちもやりましょうよ。ハードなヤツ。

オザキ

しようがないなあ。（オザキだけに照明が当たる）私は捜査一課の刑事、

オザキ

オザキだ。私は三日前、囚人護送車から脱走した殺人犯、カンドリシノブ

スズキ  
カンドリ  
オオニタ  
メグミ  
ブルーナイト  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ

を、同僚のスズキ刑事とともに追っていた。(照明が元に戻る)  
同僚のスズキです！  
これが奪った拳銃です！ まだ一発も撃ってませーん！  
(メグミに) 君の番だよ。  
えっ？  
どうした、自信がないのか。  
(メグミに) 大丈夫だよ。僕がついてるから。  
うん。(メグミだけに照明があたる) 私はどこにでもいる普通のOL、クドウメグミ。私はある日、気は弱そうだけどこいざという時は頼りになりそうなの、笑顔の素敵な男性と出会った。(照明が元に戻る)  
皆さん！ これがその、素敵な笑顔です！ (周囲の冷たい視線に気づいて) 失礼しました。

オザキ  
ブルーナイト

オザキ

キョウコ

シンド博士

タカコ

キョウコ

タカコ

オオニタ

メグミ

シンド博士

タカコ

スズキ

カンドリ

スズキ

カンドリ

スズキ

スズキ

これでハッキリしたな。

ということは、つまり――

つまり、この物語には、主人公が三人いるわけだ。

母さん、これは一体どういふことなの？

それはつまり……、どういうことなの、タカコ？

まず最初に考えられるのは、作者が主人公をわざと三人にしたって場合。

何のために？

話をおもしろくするためじゃない？ 私はあんまりいいアイデアだと思

わないけど。

そうかなあ。僕は結構おもしろいと思うけど。

冗談じゃないよ。どうして私が、刑事や改造人間なんかと共演しなくちゃ

いけないの。

(タカコに)で、次に考えられるのは？

次に考えられるのは、三つの物語が何かの理由で混ざってしまった場合。

何かの理由って？

たとえば、私たちの物語が書いてある原稿用紙が、机の上に積んであった

んだ。

それで？

カンドリ

オザキ  
オオニタ

オザキ  
スズキ

タカコ  
シンド博士  
タカコ

シンド博士  
キョウコ

オオニタ

メグミ

オザキ

キョウコ

メグミ

カンドリ

シンド博士

そこへ、ネコとネズミがやってきた。ネコとネズミは仲が悪い。当然、追いかけてこが始めた。ネズミは机に飛び乗って、原稿用紙の上を走った。そこへネコが飛びかかって、原稿用紙はゴチャゴチャになっしまった。カンドリ、おまえに頭を使う仕事は向いてない。しばらく黙ってなさい。たとえば、僕らの物語が載ってる本を、三冊いっぺんに読んでる男がいたんだ。男は三冊の本を、交互にちよつとずつ読んでいった。すると、頭の中で三つの物語がゴチャゴチャになつてしまった。

やつとまともな推理が出てきたようだな。

それって、結構ありそうな話ですよ。

あるある。私なんか飽きっぽいから、いっぺんに五冊読んだこともある。

あんた、その五冊はちやんと最後まで読んだんでしょね？

そうしようとは思ったんだけど、どれがどんな話だったか、わからなくな

っちゃつて、結局全部捨てちゃった。

捨てちゃつた？ おまえって子は、なんでもつたいたいことをするの。

母さん、ちよつと待って。(オオニタに) 私たちの物語を読んでる男が、

タカコと同じことをしたらどうなるの？

おしまいですよ。僕らは永遠にゴチャゴチャのまま。

ということは、私たちの愛もこれでおしまい？

それだけなら、まだいい。もしその男が、さらに別の本を読み始めたら？

別の物語の人たちが、またここへやってくるね。

別の物語って？

妖怪ものとか。

妖怪ものとか。

ブルーナイト

メグミ

キョウコ

メグミ

キョウコ

メグミ

キョウコ

オオニタ

オザキ

メグミ

オオニタ

メグミ

オオニタ

メグミ

オオニタ

メグミ

オオニタ

メグミ

オオニタ

メグミ

オオニタ

メグミ

オオニタ

猥褻ものとか。

イヤだ！ そんなの絶対にイヤだ！

まあまあ、落ち着いて。

これが落ち着いていられる状況？

要は、別の物語の人たちが来る前に、物語を終わらせればいいわけでしょう？

どうやって終わらせるの。物語は全部で三つもあるんだよ。

三つの物語を、絡み合わせて進めればいいじゃない。

絡み合わせて？

そうよ。ここにいるみんなで続きを考えて、一つの物語を作っていけばいいんだ。

バカバカしい。そんなことができるわけじゃないでしょう？

できないかなあ。

ジャンルの違いはどうするの。私はラブ・ストーリー畑の人間よ。アクション畑のことはまるつきりわからないし、ましてや改造人間畑のことなんて……。

畑は違っても、元はと言えば、みんな絵空事じゃない。

そりゃ、あんたはいいよ。拳銃バンバン撃って、見せ場が作れるんだから。

でも、私はどうすればいいの？ あんたたちがバンバン撃ち合ってる間、

リングサイドで応援しろってわけ？

あなたもリングの上で立ってばいいじゃない。

立ってどうするの。あなたと戦えって言うの？ あなたに殴られたら、私も彼も鼻血ブーだよ。鼻血をたらしめた男と女が、どうやってラブ・ストー

ブルーナイト  
メグミ  
ブルーナイト  
カンドリ  
メグミ  
ブルーナイト  
メグミ  
オザキ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
シンド博士  
ブルーナイト  
キョウコ  
タカコ  
キョウコ

リーをやるわけ？  
つまり、主人公として自信がないわけだ。  
何ですって？

まあ、所詮は平凡なOLのラブ・ストーリーだもんな。私たちのフアンタ  
ステイックな物語に絡んでこれないのも無理はないか。  
刑事さん、こんなヤツら放っておいて、早く続きを始めましょうよ。  
ちよつと、勝手なことをしないでよ。

おまえにつべこべ言う権利はない。おまえはリングの上に立たないんだか  
らな。そうだろう、OL。

OLじゃない、メグミだ！

威勢がいいな。

当たり前よ。OLだって、やる時はやるんだ。

メグミさん。

ああまで言われて、黙ってられるもんですか。そんなに絡んでほしいなら、  
絡んでやろうじゃないの。拳銃なんか撃てなくたって、岩なんか砕けなく  
たって、リングの上に立ってやろうじゃないの。

いいぞ、OL！

キョウコ。

バイちゃん。

その呼び方はやめてって言ったでしょう。

姉さん、がんばって。

大丈夫。なんだかんだ言ったって、あいつら人間なんだから。改造人間の  
強さを思い知らせてやる。ふんっ！（と巨大な岩を持ち上げて）ドガッ！



スズキ  
カンドリ  
オザキ  
三人  
スズキ  
オザキ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ

(と砕く)  
オザキさん。  
刑事さん、しつかり。  
心配いらない。こっちには拳銃がある。しかも三丁。  
(拳銃を構えて) シャキン!  
ハードなアクション、ぶちかましましょうね。  
いざとなったら、皆殺しだ。ドキュン!  
メグミさん、ビール。(とビールを差し出す)  
おう。(とコップを差し出す)  
(ビールを注ぎながら) 僕たち、なんか分が悪そうだから、お酒飲んだ勢いで、パーツと行こう。  
(ビールを飲み干して) そうだよね。お酒でも入ってなくちゃ、ラブ・ストリーなんかやっつけられないもんね。

メグミ  
キョウコ  
オザキ  
九人  
オザキ  
キョウコ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
オザキ  
カンドリ  
オザキ  
カンドリ  
カンドリ

それは―――  
それは―――  
それは―――  
十月の、ある風の強い日のことだった。  
私たちは相変わらず、脱走したカンドリシノブを追っていた。ズキュルズ  
ギユルズキュルズキュル。(とハンドルを切る)  
私はタカコをさらったブルーナイトを、私の全能力を使って追っていた。  
バイオニック・イヤー、ホワンホワンホワンホワン……。 (と耳をすまし  
て何か発見し) ヒュン! (と走る)  
私は玉子の彼のこと忘れられず、毎日玉子を割るたびに、あのステキな  
笑顔を思い出していた。トントン、パカ。(と玉子を割る)  
ニカ。(と笑顔)  
トントン、パカ。(と玉子を割る)  
ニカ。(と笑顔)  
カンドリは、警察官から奪った拳銃を所持している。  
フツフツフツ。これでもう恐いものはない。(と拳銃を構える)  
弾丸は六発。最悪の場合、六人の犠牲者が出る。  
これで合計十人よ。あなたと同じね、刑事さん。ドキュン!  
ドキュン!

スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ

キョウコ

ブルーナイト  
キョウコ

シンド博士

キョウコ  
シンド博士

キョウコ

タカコ  
キョウコ

言わせておけば、好き勝手なことを！（と車から降りようとして）わーっ！  
（スズキの手をつかんで）バカ！ あれは私の空想の中のカンドリよ。  
（車の中に戻って）すみません。

一刻も早く、あいつを逮捕しなければ。私は、ジワジワとこみ上げてくる  
焦燥感を、苦々しく噛みしめていた。ジャリジャリジャリジャリ。

必死の追跡にもかかわらず、ブルーナイトの行方は一向につかめなかった。  
あつちかと思えばこつち。こつちかと思えばそつち。まるで私をあざ笑う  
かのように、ヤツの足取りは滅茶苦茶だった。

ブワッハッハッハ！ 鬼さん、こちら。（と通り過ぎる）

走りながらふと横を見ると、新幹線が止まっていた。いや、止まっていた  
のではない。私と同じ速度で走っていたのだ。窓越しに手を振ってくれた  
子供たちに、笑顔で応えることも忘れない。（とニッコリ笑って）だが、

新幹線を追い抜いた瞬間、私は再び、あの激痛に襲われた。胸が！  
キョウコ。実を言うと、あなたの体はまだ完成していないの。その痛みは、  
現在入っている人工心臓MH501型に、あなたの体が拒否反応を起こし  
ているせいなの。

そうだったんですか。胸が！

私が現在開発している新型人工心臓MH502型さえ完成すれば、痛みは  
きれいさっぱり消える。もう少しの辛抱よ。

わかりました。ヒュン！（と走り出して）大阪付近で、私はついにタカコ  
の声をキャッチした。ホワンホワンホワンホワン……。 （と耳をすます）

姉さん……。

タカコ、その声はタカコね？ ホワンホワンホワンホワン……。

タカコ  
キョウコ  
タカコ  
キョウコ

ブルーナイト

キョウコ  
メグミ

オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ

姉さん、私はここよ……。

タカコ、今どこにいるの？ ホワンホワンホワンホワン……。

私がいるのはピーパーガー……。

ダメだ。ノイズが多くて聞き取れない。バイオニック・イヤー、パワー・アップ！

もうかりまつか。ぼちぼちでんな。毎度おおきに。もうムチャクチャでこ

じやりまするがな。好っきやねん。もう辛抱たまらんわ。何さらすねん。

いてまうど、われ。(と通り過ぎる)

オーツ！(と苦しむ)

その日も、いつもと同じ平凡な一日だった。いつもと同じ会社、いつもと同じ制服、いつもと同じ仕事。それなのに、私の心はなぜか明るく弾んでいた。それはたぶん、玉子の彼のせいだ。今日こそは、彼と再会できるかもしれない。そんなステキな予感がして、私は残業を早めに切り上げた。

(鏡に向かって髪型を整える)

彼もこの都会のどこかで、同じ予感に震えているかもしれない。

ブルブル。(とドアを開けて歩き出す)

私は会社を後にして、彼との再会へ向かって歩き出した。行き先はもちろん、スーパーマーケットだ。

(買い物をしている)

(買い物しながら) 私は明日の朝食のために、パンとミルクと野菜を買った。残るは玉子だ。けれど、これがなかなか見つからない。私はお店の中を二周もして、やっと目指すコーナーを発見した。ところがそこには、ワンパックしか残ってなかった。(と玉子に手を伸ばす)



オザキ

スズキ

オザキ  
キョウコ

九人

園地へ遊びに行けって言ってるんだ。

バカ！これはカンドリからの挑戦状だ。どうせ逃げ切れないなら、逮捕される前に、私と決着をつけてやるって言ってるんだ。

オザキさん。

受けてやるうじやないの、おまえの挑戦を。

一見メチャクチャに思えたブルーナイトの足取りだが、追っていくうちにある形を表していることに気づいた。それは、日本全国を股にかけた、大きな大きな渦巻き模様だった。空から見れば、まるで超特大の蚊取線香が日本列島を覆っているように見えただろう。蚊取線香は、外側から内側に向かって燃えていく。炎の行きつくその先が、ブルーナイトの目的地に違いない。私の体に埋め込まれたマイクロー・コンピューターが、その目的地を割り出した。そう、そこはデステイニーランド！

運命の遊園地！

メグミ

ちようどその頃、私と彼はデステイニールランドで、初めてのデートに胸をときめかせていた。

オオニタ  
メグミ

メグミさん、今日はカメラを持ってきたよ。(とカメラを見せる)  
二人の写真、いっぱい撮ろうね。あ、私、あれに乗りたい。

メグミとオオニタがいろんな乗物に乗る。乗った後、ドツと疲れて座り込む。

メグミ

二人だけで遊園地の雰囲気を出すのは、なかなか難しい。

オオニタ

あー、疲れた。ちよつと休憩しない？

メグミ

おなかが空いた、はらぺこだ。

オオニタ

こんな時のために、ジャーン！ 僕がお弁当を作ってきました。(とお弁当を広げる)

メグミ

わー、すごい！ ありがとう、ダーリン。

オオニタ

なんのなんの。この玉子焼き、自信作なんだ。どんどん食べて。

メグミ

いただきますーす。(と食べて) ほへ、ほっへほほひひひ。

オオニタ

とってもおいしい？

メグミ

(うなづく)

オオニタ

よかった。他の人に食べてもらうの初めてだから、朝五時に起きてガンバ

メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ

ったんだ。ガンバってよかった。  
あー、おいしかった。ごちそうさま。  
あれ、僕の分は？ どうして全部食べるんだよ。  
さあ、食後の運動だ。今度はあそこに入らない？（と指さす）  
えっ？ お化け屋敷？  
（係員に）すいません、大人二枚。  
（係員に）このお化け屋敷、怖いですか？ ……心臓麻痺で死者二名？  
わー、楽しみ！ さあ、入ろう入ろう。（とお化け屋敷に入る）  
わっ！（と驚かす）  
え？（と振り返って、驚かされたことに気づき）キャー！ 怖い！ もう、  
やめてよね。  
ごめんごめん。怖くなったら、僕の腕につかまっていいよ。  
わっ！（と驚かす）  
うっ！（と心臓を押さえて止まる）  
ダーリン、しっかりして！  
（メグミの腕につかまって）あー、ビックリした。心臓が口から飛び出す  
かと思った。  
こんな微笑ましいエピソードを繰り返しながら、私たちは奥へと進んだ。  
どれぐらい歩いた頃だろうか。私たちは奇妙な通路を発見した。  
あれ？ 左の方にも行けるみたいだ。  
よし、行ってみよう。  
でも、出口は右って書いてあるよ。  
いいからいいから。（と進むが）あれ？ もう行き止まりだ。





タカコが透明カプセルの中に立っている。

タカコ

メグミ

タカコ

オオニタ

タカコ

メグミ

タカコ

オオニタ

タカコ

メグミ

タカコ

オオニタ

タカコ

メグミ

タカコ

オオニタ

メグミ

タカコ

メグミ

オオニタ

メグミ

助けて！

お化け屋敷の続きかな？

違う違う。私はお化けじゃない！

何か言ってるみたいだけど。

姉さんに、バイオニック・キョウコに、私がここにいるって伝えて！

口だけパクパクして、金魚みたい。つんつん。(とつついて)おなか空い

たんでちゆか？

ふざけんなてめえ。

ちよつと待って。こっちの声は聞こえてるみたいだ。(タカコに)聞こえ

てますか？

バツチリ聞こえています！(と手で丸を作る)

本当だ。壊れたテレビみたいで、おもしろいね。

おもしろがってないで、何とかしてよ！

一体誰がこんなひどいことをしたんだ？

(口を大きく動かして)ブルーナイト。

何？全然わからない。

ブ。

う？

(オナラのポーズをして)ブ。わー、恥ずかしい。

わかった。プーだ。

違うわ。スーよ。

タカコ  
メグミ  
タカコ  
メグミ  
オオニタ  
タカコ  
メグミ  
オオニタ  
タカコ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ

そうじゃなくて、(とオナラのポーズをして) プ。  
わかった。プッスーだ。

なぜわからないんだ、おまえら！

それから約二時間、私たちのトンチンカンなやりとりは続いたが、ついに「ブルーナイト」という言葉は伝わらなかった。

(タカコに) そこから出すには、どうすればいいの？

そのレバーを倒すんだよ、ボケ。

この三本のレバーの、どれかを倒せばいいんじゃない？

そうよ。どうしてそれに気が付かなかったのかしら。私のバカ。

これ？

違う違う。その右の、白いレバー。

これかな？

それは絶対に触っちゃダメ！ それを倒すと、カプセルの中の空気がなくな

なって、私はもうおしまいだ！

それだって言ってるみたいだよ。

わざと間違えてるのか、おまえら！

こつちかな？

わかればいいんだ、わかれば。早く倒して！

シッ！ 誰か来たみたいだ。

あつちに隠れよう！ (タカコに) またね、金魚ちゃん。

メグミとオオニタが去る。

そこへ、ブルーナイトとカンドリがやってくる。

ブルーナイト  
カンドリ

ブワッハッハッハ！  
（周囲を見回して）へえー、ここがブルさんの隠れ家ですか。お化け屋敷の中なんて、考えましたね。

ブルーナイト  
カンドリ

ブワッハッハッハ！  
お化け屋敷の中なら、ブルさんがいても目立ちませんもんね。

ブルーナイト  
カンドリ

（タカコに気づいて）あれ、この人は？  
バイオニック・キョウコの妹、タカコだ。

ブルーナイト  
カンドリ

タカコさんですか。（タカコに）はじめまして、カンドリです。  
挨拶はいい！（タカコに）どうだ、籠の中の鳥、いや、金魚鉢の中の金魚

ブルーナイト  
タカコ

の気分は。

ブルーナイト  
カンドリ

姉さん、助けて！  
ブワッハッハッハ！ 騒いでもムダだ。

ブルーナイト  
カンドリ

この人、何か悪いことをしたんですか？  
なぜそんなことを聞く。

ブルーナイト  
カンドリ

だって、こんな狭い所に閉じ込めたら、かわいいそうじゃないですか。

ブルーナイト  
カンドリ  
ブルーナイト

ちよつと耳を貸せ。(と手招き)  
はい。(とブルーナイトに歩み寄る)

(耳元で) バカッタレ! いいか。バイオニック・キョウコは、私と互角に戦える唯一の敵なんだ。しかし、妹のこいつを捕まえておけば、私に手出しできないだろうが。

カンドリ

あ、そうか。なるほど。そういうことか。いやー、納得納得。

タカコ

あんた、本当にわかっているの?

ブルーナイト

(カンドリに) ちなみに聞いておくけど、なぜこいつを捕まえておけば、

カンドリ

私に手出しできないんだ?

カンドリ

そんなの決まってるじゃないですか。こいつがバイオニック・キョウコの

ブルーナイト

妹だからですよ。

カンドリ

だから、なぜバイオニック・キョウコの妹だと手出しできないんだ?

タカコ

んー。(考え込む)

ブルーナイト

やっぱりわかってなかったのね。

ブルーナイト

(カンドリに) 本当はわかっているんだよな? ただ、それを表現する言葉

カンドリ

が見つからないだけなんだよな?

ブルーナイト

すみません、全然わからないんで、できればヒントを。

カンドリ

もういい。頭が痛くなってきた。

ブルーナイト

風邪ですか?

カンドリ

いいのいいの、気にしないで。そんなことより、刑事たちに手がかりは残

カンドリ

してきたらどうな?

ブルーナイト

よし。バイオニック・キョウコも、もうすぐここへ来る。みんなまとめて、

タカコ  
ブルーナイト  
カンドリ  
ブルーナイト

透明カプセルに閉じ込めてやるぞ。  
姉さんが、そんな手に引っ掛かるとでも思ってるの？  
そして邪魔者がいなくなったら、いよいよ世界征服計画のスタートだ。  
なんですか、世界征服計画って？

耳の穴をかつぽじって、よく聞け。ここに取りいだしたのが、情熱薬科  
大学の研究所から盗んで、いや、頂戴してきた悪魔の錠剤、MとW。この  
2種類の薬が溶け込んだ水を、男と女に飲ませればあーら不思議。二人の  
間にできた子供は、みなすべてアライグマになってしまふという恐るべき  
代物だ。これぞ名付けて、アライグマ・プロジェクト！もちろん、人間  
をアライグマに変えて、一体何の得があるのか。世界征服がしたかったら、  
もっと別のやり方があるんじゃないのか。そういう疑問も多々あると思う  
が、難しいことは一切忘れてほしい。ただこの私が、あくまでも個人的に、  
全人類をアライグマに変身させてみたい！　そう願っていることだけのこ  
となのだ。ブワッハッハッハッハ！

そこへ、メグミとオオニタが笑いながら出てくる。

タカコ  
ブルーナイト  
オオニタ  
メグミ  
ブルーナイト  
メグミ

バカ！　どうして出てくるのよ！  
（メグミとオオニタに）何だ、おまえら。  
あ、しまった。  
あーはっはっは。（ブルーナイトに）アライグマ。あーはっはっは。  
笑ってないで、早く答えろ。  
全人類がアライグマ。あーはっはっは。

オオニタ  
メグミ  
カンドリ  
オオニタ  
メグミ  
カンドリ  
ブルーナイト  
ブルードリ  
カンドリ  
ブルーナイト  
ブルードリ  
カンドリ  
ブルーナイト  
ブルードリ  
カンドリ  
ブルーナイト  
ブルードリ  
オオニタ  
メグミ  
カンドリ

メグミさん、まずいよ。  
だってだって、あーはっはっは。

（拳銃をメグミに向けて）黙れ！

うわっ！

よくも、アライグマプロジェクトをバカにしたな。

ごめんなさい。笑ったことは謝ります。だから、許してください。

許せないわ。殺してやる！

待て、カンドリ！

止めないでください。こいつら、ブルさんの計画を――

カンドリ。私は今、すごく感動しているぞ。仲間がいるというのは、いい

ものだな。

ブルさん。

多少おつむが鈍くても、構うものか。全部私がフォローしてやる。

ありがとうございます。（メグミたちを指して）で、どうします、こいつ

ら。やっぱり秘密を知られた以上は……。（と拳銃を構える）

まあ、待て。こういう時に、すぐに殺さないのが悪役の鉄則だ。何かの役

に立つかもしれない。透明カプセルに閉じ込めておけ。

わかりました。ほら、行け！（とメグミを押す）

痛い。そんなに強く押さないでよ。

メグミさん、思い出したよ。

何を？

（カンドリを指して）この人、どこかで見たことあると思ったら、お風呂屋さんの……。

メグミ  
オオニタ  
メグミ  
カンドリ  
オオニタ  
ブルーナイト  
メグミ

お風呂屋さん？  
この顔にピンと来たら110番。  
わかった。確か、連続殺人犯の――  
カンドリシノブだ。  
（ブルーナイトを指さして）で、この人は――  
地獄のクイーン、ブルーナイトだ！  
こうして私と彼は、玉子の出会いからは想像もつかない、物語の巨大なうねりの中に、放り込まれてしまったのだった！



オザキとスズキがやってくる。車を運転している。

オザキ

彼らが物語の巨大なうねりの中へ放り込まれた頃、私たちはカンドリの隠れ家で発見した入園券を手がかりに、デステイニールランドへ向かっていた。

スズキ

ピーピーピー。(無線機のマネ)

オザキ

(マイクを取って) はい、オザキです。

スズキ

「緊急手配です。今から約三時間前、情熱薬科大学の研究所で、強盗殺人事件が発生しました」

オザキ

「研究所に強盗？ 盗まれたのは何ですか。」

スズキ

「開発中の薬品です。開発していた研究員が被害者なので、詳しいことはわかっていません」

オザキ

了解。(と切ろうとする)

スズキ

「被害者は首をねじ切られて死亡。犯人はゴリラなみの怪力の持ち主と思われまます。充分注意してください」

オザキ

了解。(と切る)

スズキ

どうします？

オザキ

無視無視。このクソ忙しい時に、他の事件に関わってられるもんですか。でも、相手がゴリラなら、撃つても構わないですよね？

スズキ

オザキ バカ！ そんなに撃ちたかったら、遊園地で赤鬼でも撃ちなさい！

そこへ、キョウコが走ってくる。

スズキ 危ない！

オザキ キーッ！（とブレーキをかける）

キョウコ ボーン！（とはねられる）

二人 グワシヤ！

キョウコ （倒れる）

二人 （倒れて逆さになる）

スズキ ……痛い。

オザキ 大丈夫？

何とか、生きてます。

今の、人間よね？

ええ。（キョウコを見つけて）あっ、あそこに倒れてます。

（ドアを開こうとするが、開かない）スズキ、そっちのドアは開く？

（ドアを開こうとするが、開かない）ダメです。

頭に……。

ケガしたんですか？

頭に血が昇ってきて、辛い。

（立ち上がって、二人に近づき）ふんっ！（と車を元に戻し）バリバリバ

リン！（とドアをもぎ取り）安全運転しようね。それじゃ。ヒュン！

キョウコ

キョウコが走り去る。

スズキ　：　今の、何だったんですか。

オザキ　：　人間じゃない？

スズキ　ただの人間が車のドアをバリバリバリなんてできますか？

オザキ　じゃ、一体何だっけ言うのよ。

スズキ　わかった、きつと改造人間ですよ！

オザキ　バカ！　しかし、どう考えても結論はそれしかなかった。

スズキ　そうか、改造人間か。サインもらっとけばよかったな。

オザキ　スズキ。さっきの無線、覚えてる？

スズキ　薬科大学がどうしたってやつですか？

オザキ　犯人はゴリラなみの怪力の持ち主だっけ言ってたよね？

スズキ　ええ、言っていました。それがどうかしましたか？

オザキ　バカ！　あいつがそのゴリラなのよ。

スズキ　えっ？

オザキ　もちろん、改造人間の姿はとっくに見えなくなっていた。しかし、ヤツが

スズキ　走り抜けたアスファルトの表面は、ブスブスと黒く焦げついていて

オザキ　ブスブスブス……。

スズキ　（車に乗って）ヤツの後を追うわよ。

オザキ　（車に乗って）はい！

オザキ・スズキが去る。  
キョウコが走ってくる。

キョウコ

デステイニールランドまであと一息という所まで迫った時、私はシシド博士が呼びかける声をキャッチした。バイオニック・イヤー！ ホワンホワン  
ホワンホワン……。

遠くに、シシド博士が現れる。

シシド博士

キョウコ、ベリーグッドニュースよ！ 新型人工心臓MH502型がついに完成したのよ！

キョウコ

本当ですか？

シシド博士

これで、あなたはもう恐いものなしよ。さあ、早く交換にいらっしやい。

シシド博士の所へ、ブルーナイトが現れる。

ブルーナイト

そうはさせるか！

二人

ブルーナイト！

シシド博士

タカコはどこにいるの？ タカコを返して！

ブルーナイト

やかましい！ それがバイオニック・キョウコの新型人工心臓だな？

シシド博士

なぜそれを。

ブルーナイト

こっちによこせ。

シシド博士

あんたなんか渡すもんですか！

ブルーナイト

ブワッハッハッハ！ ムダな抵抗はやめろ！（とシシド博士を殴り倒し、

人工心臓を奪う）

キョウコ  
ブルーナイト

母さん！  
壊しちゃおうかな。でも、壊すと話が終わっちゃうしな。バイオニック・キョウコ、返してほしいか？ 返してほしかったら、返してチョンマゲと言え。

キョウコ  
ブルーナイト

それだけは勘弁してくれ。チョンマゲだけは……。  
言わないと、この人工心臓は木っ端微塵になるぞ。

キョウコ  
ブルーナイト

わかった。言うから待って。(小声で) 返してチョンマ……。  
ゲはどうした。ゲは。

キョウコ  
ブルーナイト

返してチョンマゲ。  
よし。おまえの努力に免じて、今回は返してやろう。さあ、受け取れよ。

シンド博士  
ブルーナイト

やめて！ こんなところから投げないで！  
やかましい！ (とシンド博士を殴り倒して) ブルー・キーツク！ (と人工

キョウコ

心臓を蹴る)  
母さん、今助けに行きます！

シンド博士  
キョウコ

私のことはいいから、人工心臓を取りに行きなさい。早く！  
クソーツ！ 私は、母さんに心の中で謝り、人工心臓を追った。

キョウコが走り去る。ブルーナイトがシンド博士を引きずって去る。  
オザキとスズキが走ってくる。

スズキ  
オザキ  
スズキ

待ってくださいよ、オザキさん。  
情けない声を出すんじゃないの。  
だって、もう十キロ以上走ってますよ。

オザキ  
スズキ  
二人  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
スズキ  
二人  
オザキ  
スズキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ

十キロが何だ！ と口では言いながら、実際は辛かった。改造人間の足跡は、偶然にもデステイニールランドの方向へ続いていた。

オザキさん、車です！

ブオーツ！

（拳銃を構えて）止まれ、警察だ！

オオーン……。（車を見送って）拳銃なんか出したら、止まるわけないでしょう？

行くぞ。

あれ？（と立ち止まる）

何してるの。置いていくよ。

聞こえませんか、あの音。（と耳をすます）

また車？

いえ、そういう音じゃなくて……、右？ いや左？ いや上？ 空だ！

（空を見上げて）ヒュウツ！

空から、何かがゆつくりと落ちてくる。オーライオーライ！（と両手を広げる）

オザキさん、危ないですよ。

オーライオーライ！ ヒュウー！（と避けて）ドゴツ！

（オザキの足元を見て）うわー、何だこりや。

（落下物を拾い上げて）それは、どことなく人間の心臓を連想させる、金属製の物体だった。

気持ち悪い。捨てましょうよ。

バカ！ 昔から、落とし物は警察が預かるって決まってるのよ。

オザキとスズキが去る。

メグミ・オオニタ・タカコが透明カプセルの中に立っている。その横で、カンドリが雑誌を読んでいる。

メグミ

彼らが改造人間を追いかけてデステイニールランドへ向かっている頃、私はちがブルーナイトの手によって、透明カプセルに閉じ込められていた。

オオニタ

(カンドリに) お願いです！ ここから出してください！

タカコ

(カンドリに) 出してくれたら、おいしいカルボナーラを作ってあげますから。

オオニタ

(カンドリに) 出さねえと、ケツの穴から手え突っ込んで奥歯ガタガタ言

メグミ

わせたると、おら！  
声は聞こえないけど、物凄いいことを言ってるみたい。

オオニタ

もうダメだ。僕はここで死ぬんだ。

メグミ

(オオニタに) ねえ、ダーリン！  
まだこんなに若いのに。なんて悲しい人生なんだ。(と泣く)

オオニタ

泣いてないで、こっち向いてよ！  
ダーリンてば！  
それこれも、みんなメグミさんが悪いんだ。僕はあれほど右だって言ったのに……。(とメグミを見て) あれ？



メグミ  
オオニタ  
メグミ

オオニタ

メグミ  
カンドリ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
タカコ  
オオニタ

よかった。やっと気づいてくれた。  
どうかしたの？

その子（タカコを指さす）と（戸を開ける）私たち（自分たちを指さす）  
で（手を指さす）協力して（握手）、そいつ（カンドリを指さす）に（指  
を二本立てる）このカプセル（カプセルを指さす）を（しっぽ）開けさせ  
よう（両手を交差して開く）。

彼女（タカコを指さす）と（戸を開ける）僕たち（自分たちを指さす）で  
（手を指さす）握手して（握手）、その人に（カンドリを指さす）ピース  
して（指を二本立てる）、このカプセル（カプセルを指さす）を（しっぽ）  
大魔神（両手を交差して開く）。

今、何て言った？ 大魔神？ 違う！ 大魔神じゃない！  
（メグミを見ている）

あーん、早く出してよー。（と泣く）  
バカだなあ。泣いてらあ。（と雑誌を読み始める）

（オオニタに）だから、そのレバーを、何とかして倒させるのよ！  
え？ よくわかんないよ。

こうなったら色じかけよ。色じかけ！  
メグミさん。僕も愛してるよ。

そうじゃなくて、あいつに向かって、色じかけで迫るの。  
あ、そうか。そういうことか。（とカンドリに）はーい、ハニー。

ちよっと、何してるの？  
君にやってるんじゃないよ。（とカンドリに）はーい、僕といいことしな  
いか？（と服を脱ぎ始める）

カンドリ  
オオニタ  
カンドリ  
オオニタ  
カンドリ  
オオニタ  
カンドリ  
オオニタ  
カンドリ  
オオニタ  
カンドリ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ

あー、留守番で、結構退屈だなあ。(と振り向いて) ん？  
やあ、お嬢さん。

あー、その中、暑いのか？

言葉はいらぬ。僕がほしいのは、君の甘い口づけだけ。

イヤだ。そういうこと？ ガクン。(とレバーを倒して) ウイーン。

やったー！

(出てきてカンドリに) 待った？

全然。

(歩み寄って) 初めて会った時から、運命を感じていたんだ。

私もよ。

(カンドリの肩に手をかけ、そっと拳銃を取って) 君に会えてうれしいよ。

そんな、私まだ心の準備が、バツチリオークイよ！(とオオニタに抱きつ

こうとする)

(拳銃を構えて) 動かないで！

あー、怖がらなくていいのよ。

そうじゃなくて、この中に入って。早く！

え？ この中で？(と透明カプセルの中に入る)

ガクン！(とレバーを上げて) ウイーン。

あー、あなたは入ってこないのか？

まだわからないのか、この女は。ガクン！(とレバーを倒して) ウイーン。

(出てきて) 見直したよ、ダーリン！

いやあ、メグミさんのためなら、これくらいどうってことないよ。

さあ、早く逃げないと、ブルーナイトが戻ってくる。

タカコ  
メグミ  
タカコ  
二人  
タカコ  
オオニタ  
タカコ  
二人  
タカコ  
二人  
タカコ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
タカコ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ

姉さん、聞こえる？ 私はここよ。  
しつかりして！ まだ助からないって決まったわけじゃないよ。  
違うよ。私は姉さんに助けを求めているの。姉さん、聞こえる？ 私はここよ。  
しつかりして！  
だから、私の姉さんはバイオニック・キョウコなの。  
何だよ、そのバイオニック・キョウコっていうのは。  
かくかくしかじか。  
えーっ？ ホントに？  
姉さんがここから百キロ以内になれば、私の声をキャッチできるの。  
へー、便利だねえ。  
姉さん、聞こえる？ 私はここよ。  
私もここよ。  
早く助けに来てくれ！  
このままジツとしてても仕方ない。私、上まで登ってみる。うまく登れたら、助けを呼んでくる。(と行こうとする)  
待った。こういう時は、男が呼びに行くもんだよ。  
ダーリンはここに残ってて。その人一人じゃ心配なもの。  
姉さん、私はここよ。  
(メグミに)でも、それはまずいよ。  
どうして？  
だって、君が助けを呼んできたなら、この事件を解決したのは、君だってことになるじゃないか。

メグミ  
オオニタ  
それでもいいじゃない。主人公は私なんだから。

メグミ  
でも、相手役の僕の立場は？

タカコ  
つべこべ言っていないで、拳銃を貸して。(とオオニタの手から拳銃を取る)

カンドリ  
姉さん！ 私はここよー！

メグミ  
ブルさん！ 私はどうやら騙されたみたいでーす！

オオニタ  
(オオニタに) じゃ、またね。

メグミ  
僕の立場は？

私は、長い洞窟のようなスロープを腹這いになって登っていった。勾配がかなりきつかったもので、途中で何度も滑り落ちそうになった。(と滑り落ちるが、踏みとどまって) しかし、私はくじけない。

シンド博士が転がりながらメグミの横を通り過ぎる。

メグミ  
何だ何だ何だ！ その時、私はスロープが二つに分かれていることに気が

付いた。あっ、また誰か来る。えーい、こっちだ！

メグミが去る。違う場所からブルーナイトがやってくる。

ブルーナイト  
ブワッハッハッハ！

ブルーナイトが去る。

キョウコがやってくる。フラフラして、今にも倒れそうだ。後を追って、オザキとスズキがやってくる。拳銃を構える。

スズキ

オザキ

キョウコ

スズキ

ヨウコ

二人

キョウコ

スズキ

オザキ

スズキ

キョウコ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

動くな！

改造人間、神妙にお縄を頂戴しろ！

人工心臓を……、人工心臓をよこせ……。 (と倒れる)

とうとう観念したか。口ほどにもないヤツだ。 (と手錠をかけようとする) キ

(ビクンと動く)

ギヤアーツ！ (と離れる)

(動かなくなる)

……オザキさん。

油断するんじゃない。

わかってます。(キョウコに) おい、改造人間、無駄な抵抗はやめろ。

(動かない)

聞いているのか、改造人間！

バカ！ 急に大きな声を出すんじゃないの。

でも、こいつピクリともしませんよ。

さつきビョーンって動いたでしょう、ビョーンって。

スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ

もう大丈夫なんじゃないですか？  
じゃ、あんた、揺すってみなさい。

私がですか？

ほら、拳銃を貸して。(とスズキの拳銃を取って)何かあったら、私がすぐに撃ってあげるから。

でも……

でも何。

確か、『エイリアン』にもこんなシーンがありましたよね？

それがどうしたの。

私の役の人、エイリアンにガバって。(と泣く)

バカ！ 刑事が泣くんじゃない！ 何が『エイリアン』だ。

オザキさんは見てないから、そんな残酷なことが言えるんです。

『エイリアン』なら見たわよ。1から4まで全部。その私がついてるんだから、大丈夫大丈夫。

だったら、オザキさんがやってくださいよ。

わかったわよ。やればいいんでしょう？

私の拳銃、返してください。

しょうがないな。あれ？ 取れない。拳銃が手にくっついてる。

そんなバカな。

あ、そうだ。さっき手にアロン・アルファ塗つといたんだ。ごめんごめん。

さあ、やりなさい。

そうまでして、私に『エイリアン』の二の舞を踏ませたいんですか。わかりましたよ。

オザキ  
スズキ  
いいから、早く。  
援護、お願いします。

オザキ  
スズキ  
おい、どうした！　しっかりしろ！（と揺すって、すぐに離れる）

キョウコ  
オザキ  
（動かない）  
死んでるの？

スズキ  
（キョウコに）おい、死んでるのか？　死んでるなら、死んでますって言え。（とゆっくり近づく）

キョウコ  
スズキ  
（ビクンと動く）  
ひーっ！  
ドキュン！　ドキュン！　ドキュン！　ドキュン！　ドキュン！　ドキュン！

スズキ  
オザキ  
オザキさん、もうそのへんで――

スズキ  
オザキ  
カチカチカチカチ。（弾丸がなくなっただの）

スズキ  
オザキ  
ずるいなあ、自分ばかり撃って。

スズキ  
オザキ  
どう？　死んだ？  
わかりません。前と同じです。

キョウコ  
オザキ  
オザキが倒れている段の下から、メグミが顔を出す。（オザキとスズキには見えない）

メグミ  
オザキ  
撃たないでください。

スズキ  
オザキ  
いいえ、何も。今何か言った？





オザキ  
メグミ  
オザキ  
メグミ

(メグミに) おまえ、脱皮するの  
か？  
はあ？  
これ以上とぼけると、撃つ！  
撃たないでください！ 今、出ますから。

オザキとスズキが拳銃を構える。と、キョウコの下からメグミが出てくる。

メグミ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
メグミ  
オザキ  
メグミ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
メグミ

(キョウコを見て) 何ですか、この人？ (オザキたちに) どうも。  
スズキ。  
はい。  
このことは、恥ずかしいから誰にも言うな。  
二人だけの秘密ですね。  
あなたたち、刑事だって言いましたよね？ 実は今、大変な事件が起きて  
るんです。すぐに私と来てください。  
どこへ？  
(指さして) すぐその、デステイニールランドです。  
私たちもそこへ行くところだったんだ。  
(メグミに) この穴はどこに続いているの？  
お化け屋敷の地下です。  
わかった。スズキ、おまえはそいつを見張ってなさい。  
一人でですか？  
何かあったら、死んだフリをなさい。  
(キョウコを指して) 何なんですか、あの人。お腹でも空いてるんですか？

オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
メグミ  
オザキ

いいから、早く案内しなさい。  
はい。(と穴に入る)  
オザキさん、これが一生のお別れだ、なんてことはないですよ？  
バカ！ 危なくなったら、ケータイで呼ぶんだ。(と穴に入る)  
健闘を祈ります。(と敬礼)  
(敬礼を返して、穴に消える)

メグミとオザキがやってくる。

メグミ 刑事さん、ここです！　ここがブルーナイトの秘密基地です！　あれ？  
 オザキ 誰もいないじゃない。  
 メグミ おかしいなあ。確かにさっきまでいたんだけど。

メグミの背中に、シシド博士が倒れかかる。

メグミ わーっ！（とシシドの体を突き飛ばす）  
 シシド博士 うー。（と倒れる）

オザキ （拳銃を構えて）出たな、ブルーナイト！  
 メグミ 待ってください。この人はブルーナイトじゃありません。もしかしたら、ブルーナイトが作った改造人間じゃないですか？  
 オザキ そうか、改造人間か。でも、これは失敗作だな。

シシド博士 （上半身を起こして）うー。（と首を横に振る）  
 メグミ 何か言いたいみたいですよ。  
 オザキ 油断するな。相手は怪物だ。  
 メグミ （シシド博士に）どうしたの、怪物さん。何か私たちに言いたいことがあ

シシド博士  
メグミ  
シシド博士  
メグミ  
オザキ  
メグミ  
シシド博士  
メグミ  
シシド博士  
メグミ  
オザキ  
メグミ  
シシド博士  
メグミ  
シシド博士  
メグミ  
オザキ  
メグミ  
シシド博士  
メグミ

るの？

オモ、オモモ……。

おもちが食べたい？

オモカゲ、チョ、チョ、チョ……。

面影チョコチョコ？（オザキに）一体何のことでしょう？

オモチャのチャチャチャに関係あるのかもしれない。

（シシド博士に）オモチャのチャチャチャに関係ある？

うー。（と首を横に振る）

（オザキに）ないそうです。

チョコ、チョコ、チョコスイチ……。

貯水池？ そうか、面影貯水池ね？

うー。（とうなずく）

面影貯水池がどうしたの。

わかった！ ブルーナイトは、きっとそこへ行っただんですよ！

どうして貯水池なんかへ？

さっき説明したでしょう？ 全人類をアライグマにするためにです。

薬科大学で盗んだ薬で？

そうです。その薬を、面影貯水池に投げ込むつもりなんですよ。

（シシド博士に）カンドリも、一緒に行ったの？

うー。（うなずく）

私のダーリンも？

うー。（うなずく）

バイオニック・キョウコの妹さんも？



オザキ  
メグミ  
オザキ  
メグミ  
オザキ

阻止してみせます。  
ちよっと待って！

どうしたんですか、刑事さん？

(シシド博士に) 危ない危ない。危うく引つかかるところだった。うまく化けたつもりでも、このオザキマユミの目はごまかせないわよ。うまくそれじゃ、この人はシシド博士じゃないんですか？  
(シシド博士に) これが動かぬ証拠だ！

オザキがシシド博士の白衣をめくる。白衣の内側に、○に「ブ」の字が書いてある。

メグミ  
オザキ

あつ！

透けて見えてたわよ、バカタレが。

シシド博士  
バレちゃあ、しょうがない。ブワッハッハッハ！

シシド博士の背後から、ブルーナイトが現れる。シシド博士はその場に倒れる。

メグミ  
ブルーナイト

あつ！ あんたは——

オザキ  
ブルーナイト

地獄のクイーン、ブルーナイト！

ブルーナイト  
カーン。(とはね返す)

ついで出てきたな、怪物め。ドキュン！ (と撃つ)

オザキ  
ブルーナイト

くそー。ドキュン！

ブルーナイト  
カーン。カーン。カーン。カーン。ブルー・ビーム！

ドキュン！ ドキュン！

二人

うわーっ！ (と頭を抱えて苦しむ)

ブルーナイト  
二人  
ブルーナイト

ブルー・フリーズ！  
うわーっ！（と凍りつく）

ブワッハッハッハ！（と薬を取り出して）これが何だかわかるか？ おま  
えらが探していた、アライグマ・タブレットだ。ほしいか？ ほしいよな  
？ じゃ、ここに置いとくぞ。（と床に置いて）さあ、遠慮せずに持って  
いけ。どうした、いらぬのか？ いらぬなら、私が使うぞ。（と拾っ  
て）じゃ、仕方ない。おまえらの子孫を、アライグマに変えるしかないな。  
それじゃ、ちよっくら出かけて、人類の未来を真っ暗にしてくるわ。おま  
えらは、そこで指をくわえて待っている。ブルー・フィンガー！  
うわーっ！（と指をくわえる）  
一生そうやってろ。じゃあな。ブワッハッハッハ！

二人  
ブルーナイト  
ブルーナイトが去る。

オザキ  
メグミ  
シンド博士  
オザキ  
メグミ  
シンド博士  
オザキ  
メグミ  
シンド博士  
オザキ  
メグミ  
シンド博士  
オザキ  
メグミ  
シンド博士  
オザキ  
メグミ  
シンド博士

何だあいつ、言いたいこと言いやがって。何がブルー・フィンガーだ。そのまま英語にしたらだけじゃないか。  
シンド博士！起きてください！  
いつまで寝てるの。あんたの出番よ！  
うっ！（と気が付いて、二人を見る）  
そんなにじろじろ見るな！  
ブルー・フィンガーにやられたのね？  
知ってるの？  
当たり前よ。ブルーナイトを倒すために、二十年も研究を続けてきたんだから。ヤア！キエー！（と気合いで解く）  
刑事さん、急いでバイオニック・キョウコに連絡を取りましょう。  
そうだ、すっかり忘れてた。  
あなたたち、バイオニック・キョウコに会ったの？  
会ったって言うか、見たって言うか。  
バイオニック・キョウコは、今、どこにいるの？  
この遊園地のすぐそばで寝てます。  
どうしてそんな所で？  
動かなくなっただけだよ、突然。



シシド博士

メグミ

シシド博士

オザキ

シシド博士

メグミ

シシド博士

オザキ

メグミ

オザキ

シシド博士

オザキ

シシド博士

オザキ

シシド博士

オザキ

シシド博士

オザキ

メグミ

オザキ

メグミ

メグミ

そうか。やっぱりMH501型では無理だったのね。

何ですか、それ？

旧型の人工心臓。バイオニック・キョウコの体は、それに拒否反応を起こしたの。

それじゃ、あの改造人間はもう使いものにならないわけ？

いんや。新型人工心臓MH502型さえ取りつけられれば元通りになるんだけど……。

取りつけましようよ、早く。

それがここにはないの。バイオニック・キョウコが取りに行ったんだけど、

持ってなかった？

さあ……。

持っていないから、倒れちゃったんじゃないんですか？

それじゃ、あの改造人間は……。

おーっ！（と泣く）

博士のくせに、泣くな！ いくら改造人間だって、動かなければ、ただの粗大ゴミよ。こうなったら、私だけで何とかしよう。おばさん、ブルーナイトはどこへ行ったか知ってる？

おーっ！（と泣く）

知らないの？ 行き先がわからなくちゃ、追いかけるようがないじゃない。

（とレバーを上げて）ガクン、ウイーン。あららら？

透明カプセルです。この中に閉じ込められてたんですよ。あれ？

何よ。

刑事さん、ここを見てください、ここ！

オザキ  
メグミ  
オザキ  
シンド博士  
メグミ

オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
シンド博士  
メグミ

何か、文字が書いてあるわね。

きつと、私のダーリンですよ。私たちに、行き先を教えるために。

(読んで)ア、イ、シ、ユ、ウ?

哀愁ダムよ! 東京の水は、全部あそこから供給されてるの。

ブルーナイトは、そこにアライグマ・タブレットを投げ込むつもりなんですよ!

そうはさせるか。(と携帯電話をかける)

(携帯電話を出して)はい、こちらスズキ。

すぐに哀愁ダムに直行して。私たちも後からすぐに行くから。

でも、ここからだど、どんなに車を飛ばしても三時間はかかりますよ。

そんなことはわかってるわよ! でも、行かなくちゃ、これから生まれてくる子供が全部、アライグマにされるのよ。

アライグマ?

そうよ。あんたが、人類の未来を真っ暗にしたいなら話は別だけど、私はまだ人間を信じてるところがあつてね。

オザキさん、話がよーくー

わからないんなら、黙ってさつさと出発しなさい!

でも、改造人間はどうしましょう。

放っておけばいいわよ。どうせもう使いものにならないんだから。

くそーっ! バイオニック・キョウコさえ動けば、哀愁ダムなんて、あつという間なの!

仕方ないですよ。バイオニック・キョウコは、粗大ゴミになっちゃったんだから。

オザキ  
シンド博士  
メグミ  
シンド博士  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
シンド博士  
スズキ  
シンド博士  
スズキ  
シンド博士

行くぞ、OL。  
MH502型さえあれば……。あの、どことなく人間の心臓を連想させる、  
金属製の新型人工心臓さえあれば……。  
今、何て言いました？  
どことなく人間の心臓を連想させる、金属製の新型人工心臓。  
その一言を待ってたのよ、おばさん！  
（車に向かつて）止まれ！警察だあ！  
（携帯電話を出して）スズキ！聞こえる？  
（携帯電話を向かつて）すみません。すぐに車を拾って出発しますから。  
出発はしなくていいわ。物語のあつちとこつちを一つに結び付ける科白が、  
ついに出てきたのよ。  
それじゃ、いよいよ……。  
いよいよバイオニック・キョウコを復活させる場面が来たのよ。捨ててな  
いでしようね、あの空から降ってきた金属製の物体は！  
もちろんですよ。この場面のために、この通り！  
後は頼んだよ、おばさん！（と携帯電話をシンド博士に渡す）  
（携帯電話に向かつて）私はシンド博士。バイオニック・キョウコの生み  
の親よ。今から、私の言う通りに作業してちょうだい。いいわね？  
任せてください。何のために、こんな所でじっと待ってたと思うんですか。  
すでに、旧型人工心臓MH501型は取り外してあるわね？  
はい、取り外してあります。  
では、新型人工心臓をよく見て。どこかに、アルファベットのBの文字を  
型取った突起物があるでしょう。



シシド博士  
スズキ  
シシド博士  
スズキ  
シシド博士  
スズキ  
シシド博士  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
メグミ  
オザキ  
キョウコ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
キョウコ  
四人

777と表示させるのよ。  
777、スリーセブンですね？  
それが完了した時点で、バイオニック・キョウコは復活する。まず最初は

左のつまみ。  
カチカチカチカチカチカチカチ……、7。

次は真ん中のつまみ。  
カチカチカチカチカチカチカチ……、7。

そして最後は右のつまみ。  
カチカチカチカチカチカチ……、7。完了しました！

どう？  
変化ありません。倒れたままです。

そんなあ。  
(シシド博士に)変化しないって言ってるぞ。

(ゆつくりと動き出す)  
オザキさん！

どうした！  
改造人間が、バイオニック・キョウコが動き出しました！

(悠然と立ち上がって)バイオニック・キョウコだよーし！

メグミ  
キョウコ

シンド博士  
キョウコ

オザキ  
キョウコ

スズキ  
キョウコ

シンド博士  
キョウコ

シンド博士  
キョウコ  
シンド博士

(レシーバーに) というわけなんです。

そうかそうかそうだったのか！ 現在私の置かれている状況と、様々な人間関係を、隅から隅まで一瞬にして把握した！

キョウコ、新型人工心臓の調子はどう？

最高ですよ、母さん。温泉に行つて、ビールを浴びるほど飲んで、十二時間寝た後のように爽やかな気分です。

ここまで何分で来られる？

分？ ふふーん。分なんてかかりませんよ。(スズキに) さあ、私の腕につかまつて。

失礼します。(とつかまる)

行くよ。ヒュン！ お待たせ。

キョウコ！

心配をかけてすみませんでした、母さん。直ちに哀愁ダムへ急行して、ブルーナイトの陰謀を阻止してきます。

キョウコ、一つ言い忘れていたわ。ブルーナイトの弱点は、腋の下よ。

腋の下？

そうよ。何の論理的根拠もないけど、とにかく腋の下なの。あなたのバイオニック・フィンガーで、死ぬまでくすぐつてやりなさい。

キョウコ　わかりました。(三人に) さあ、みんな、私の腕につかまって。  
シンド博士　いよいよクライマックスよ。しつかり盛り上げてきてね。

キョウコ　任せてください。今まで寝ていた分を、倍にして取り返してきます。  
シンド博士　健闘を祈る。

キョウコ　(三人に) 準備はいい？

三人　オーケイ！

キョウコ　バイオニック・キョウコだ！　シュワーツ！(と飛ぶ)

三人　うわーっ！(と飛ぶ)

違う場所へ、オオニタとタカコが転がり込む。両手を後ろで縛られている。後から、ブルナイトがやってくる。

ブルナイト　ブワッハッハッハ！　いよいよクライマックスだ。張り切って行こうね。

タカコ　姉さん！　私はここよ！　早く助けに来て！

オオニタ　メグミさん！　僕はここです！　なんて悲しい人生なんだ！

ブルナイト　もっと泣け！　もっとわめけ！　いくら助けを求めたって、バイオニック

・キョウコは来ないんだ！

そこへ、カンドリがやってくる。手にはナイフ。

カンドリ　ブルさん、準備オーケイです。

ブルナイト　ご苦労ご苦労。一人残らず始末してきたらうな？

カンドリ　はい、ちよろいもんでした。

ブルーナイト  
カンドリ

当たり前だ。ダム管理ビルに強盗が入るとは、誰も思わないからな。  
こいつらはどうします？

オオニタ  
ブルーナイト

（手首のロープをほどこうとしていたが、ふと止めて）助けてください！  
心配するな。殺しはしない。アライグマ・タブレットをここへ投げ込んだら、まず最初におまえらに飲ませてやる。

カンドリ

そいつは楽しみですね。こいつらがアライグマに変身するところが見られるってわけだ。

ブルーナイト

おまえ、全然わかってないな。アライグマになるのはこいつらじゃない。

カンドリ

こいつらの子供だ。

ブルーナイト

でも、こいつら、まだ結婚してませんよ。

オオニタ

もういい。とにかく笑おう。ブワッハッハッハ！  
（ロープがほどけて）やった！

キョウコ

何か言ったか？  
いえ、別に。

オザキ

シュワーツ！  
哀愁ダムはまだ？

メグミ

あっ、あれじゃないですか？（と指さして）あの大きな水たまり！  
（下を見て）オザキさん、私、高い所はダメなんです！

オザキ

バカ！ 目をつぶってればいいでしょう？  
なるほど。（と目を両手で覆って）うわーっ！（と落ちる）

スズキ

バカ！  
何やってるのよ、この忙しい時に。シュワーツ！（とスズキを追う）

オザキ

キョウコ



スズキ

(キョウコの手をつかんで) あーん、怖かったよー!

ブルーナイト

それでは、これよりアライグマ・プロジェクトを開始する。こっちがアラ  
イグマ・タブレットM。こっちがアライグマ・タブレットWだ。

カンドリ

前から聞こうと思つてたんですけど、MとWってどういう意味ですか?

ブルーナイト

おまえ以外の人間はとくに気が付いてるぞ。(オオニタに) なあ?

オオニタ

(タカコのロープをほどこうとしていたが、ふと止めて) さあ、僕は気が  
付かなかつたけど。

タカコ

まさかとは思うけど、MはMAN、WはWOMANの頭文字?

ブルーナイト

そうだ。物凄い安直さだろう。ほら、カンドリ。(とタブレットMを差し  
出して) こっちはおまえが投げる。

カンドリ

(受け取つて) 私がですか?

ブルーナイト

プロデェクトつて言つたつて、要するにただ投げ込むだけだ。一人でやっ  
てもおもしろくない。

カンドリ

身に余る光栄です。カンドリシノブ、全力でやります!

ブルーナイト

それでは、人類の真つ暗な未来を祝福して。

カンドリ

ブルさんの世界征服への第一歩を祝福して。

二人

乾杯!(とタブレットの瓶で乾杯する)

オオニタ

(タカコのロープがほどけて) やつた!

二人

(瓶を投げようとして) 一、二、の――

オオニタ

えいっ!(とブルーナイトに体当たり)

ブルーナイト

あっ!(とタブレットを落とす)

タカコ

こんちくしょう!(とカンドリからタブレットを奪う)

キョウコ

シュワーツ！

メグミ

あの大きなビルは何？

オザキ

哀愁ダムの管理ビルだ、たぶん。

スズキ

オザキさん、屋上に誰かいます！

キョウコ

見えた、ブルーナイトだ！

オザキ

カンドリも一緒？

メグミ

ダーリン！ 私よ！ 助けに来たよ！

キョウコ

バカ！ 手を振るな！ バランスが崩れる！

ブルーナイト

どこだ！ アライグマ・タブレットはどこだ！

タカコが走り去る。

ブルーナイト

何をボケっとしてるんだ！ あの女を追え！

カンドリ

はい！

カンドリが走り去る。

ブルーナイト

（オオニタに）タブレットはどこに隠した。

オオニタ

知らないよ。（と後ずさり）

ブルーナイト

返せ。（と迫る）

オオニタ

知らないって言ってるだろう。あーっ！（と足を踏み外しそうになる）

ブルーナイト  
オオニタ  
もう後はないぞ。さあ、どうする？（と迫る）  
うわーっ！（と落ちる）

メグミ  
スズキ  
オザキ  
キョウコ  
四人  
（手を滑らせて）うわーっ！ 落ちる！（とスズキにつかまる）  
重いー！ 放せー！  
バカ！ 暴れるんじゃない！（とスズキを叩く）  
ダメだ！ もう限界だ！（と態勢を崩す）  
うわーっ！（とバラバラに落ちる）

オオニタ  
ブルーナイト  
うわーっ！（と落ちるが、両手で縁につかまる）  
危ないところだったな。しかし、悪役はこういう時に、必ずこれをやることになってるんだ。グリグリグリ。（とオオニタの手を踏む）  
痛い痛い痛い！

オオニタ  
ブルーナイト  
前から一度やってみたかったんだ。グリグリグリ。  
ちよつと待って！ まさか、本気で落とすつもりじゃないよね？  
本気に決まってるだろう。グリグリグリ。（と反対側の手を踏む）  
オオニタ  
でも、僕はメグミさんの相手役なんだよ。僕が死んだら、僕とメグミさんの物語はどうなるんだ。

ブルーナイト  
オオニタ  
おまえ、『タイタニック』を見てないのか？ ラブストーリーっていうのはな、主役のどっちか片方が死んだ方が盛り上がるんだ。  
冗談じゃない。話を盛り上げるために、殺されてたまるか。  
オオニタ  
うわーっ！（と落ちる）  
だったら、自分で何とかしろ。グリグリグリ！

キョウコ  
オオニタ

(飛んできて、オオニタを受け止めて) 大丈夫かい、お兄さん？  
ありがとう、バイオニック・キョウコ。

メグミ  
スズキ

うわーっ！(と落ちる)  
ひよえーっ！(と落ちる)

オザキ  
三人

誰かー！私を受け止めてーっ！(と落ちる)  
ボツチャーン！ジュブジュブジュブジュブ。(と沈む)  
ーシューワー。(と泳ぐ) ぷはっ！(息を吐く)

オザキ  
スズキ  
メグミ

スズキ、大丈夫？  
何とか生きてます。  
刑事さん、早く岸へ！

三人が泳ぎながら去る。

タカコが飛び出す。後を追って、カンドリが飛び出す。

タカコ  
カンドリ

姉さん、聞こえる？ 私とタブレットMはここよ。  
そいつは、私がブルさんからもらったんだ。いつあんたにあげるって言っ  
た？

タカコ  
カンドリ

あつ、いい男！（と遠くを指さす）  
もうその手には引っかからないよ。（とタカコの腕をつかむ）

そこへ、メグミが飛び出す。

メグミ  
カンドリ  
メグミ  
カンドリ  
メグミ  
カンドリ  
メグミ

（拳銃を構えて）動かないで！  
あ、それ、私の拳銃。  
タカコちゃんを放しなさい。ただのOLでも、撃つ時は撃つよ。  
（タカコの首にナイフを突きつけて）これでも撃てるか？  
ナイフなんて、どこに持ってたのよ！  
細かいことは気にするな。さあ、拳銃を返せ！  
わかった。ほら。（と拳銃を床に置く）

そこへ、オオニタが飛び出す。

オオニタ

タカコ

オオニタ

メグミ

オオニタ

カンドリ

オオニタ

(カンドリに飛びついて)二人とも、逃げて！  
ありがとう！(と走り去る)

メグミさんも早く！  
でも、一人で大丈夫？

見損なってもらっちゃ困るな。僕だって、男だよ。

ブルさん、助けて、私はここよ。  
マネしたってダメだ。ブルーナイトは来ないよ。

そこへ、ブルーナイトが現れる。

ブルーナイト

オオニタ

ブルーナイト

オオニタ

ブルーナイト

カンドリ

ブルーナイト

カンドリ

オオニタ

カンドリ

オオニタ

ブワッハッハッハ！ 来ちゃったよーん。

それ以上近寄ると、おまえのかわいい部下が痛い目にあうぞ。

ブルー・ビーム！

うわーっ！(と倒れる)

(カンドリに)後は自分でできるな？

はい。(と拳銃を拾う)

遠くからおまえのことを応援しているぞ。(と去る)

(オオニタに拳銃を向けて)覚悟はいい？

よくない。

ついに私にも拳銃を撃つ場面が来た。

まあまあ、そんなに興奮しないで。僕を殺して何になるんだ？

カンドリ

純情な乙女心を弄んでおいて、よくそんなことが言えるね。あんただけは絶対には殺してやる。

オオニタ

気持ちにはわかるけど、やめた方がいい。僕が死んだら、メグミさんを守る人間がいなくなる。それでメグミさんまで死んだら、僕らの物語はおしまいだ。

メグミ

私は大丈夫よ。たとえ一人になっても、最後まで戦い抜く。

オオニタ

君って女は、どこまで逞しいんだ。

カンドリ

つべこべ言っていないで、なかよく二人であの世へ行け！

違う場所に、オザキとスズキが飛び出す。

オザキ

スズキ！ どうだった？

スズキ

この階にもいませんでした。もっと上じゃないですか？

そこへ、ブルーナイトが飛び出す。

ブルーナイト

ブルー・ビーム！

二人

うおーっ！（と苦しむ）

そこへ、キョウコが飛び出す。

キョウコ

バイオニック・フラッシュ！

ブルーナイト

うおーっ！（と苦しみながら去る）

スズキ  
オザキ  
キョウコ

ありがとう、バイオニック・キョウコ。  
(キョウコに) カンドリは見なかった？  
バイオニック・イヤー！ ホワンホワンホワンホワン……。

違う場所で、さっきの場面が繰り返されている。

カンドリ  
オオニタ  
カンドリ  
キョウコ

(オオニタに拳銃を向けて) 覚悟はいい？  
よくない。  
ついに私にも拳銃を撃つ場面が来た。  
(オザキとスズキに) よく聞いて。カンドリは、このすぐ上の階にいる。  
天井の厚さは約三十センチ。あんたたちの拳銃で充分に撃ち抜ける。天井  
に向かって構えて。

二人  
キョウコ

よし。(天井を狙う)  
カンドリが私の真上に来たら、ゴー・サインを出す。そうしたら、私の真  
上を狙って一斉に撃つんだ。わかった？

二人  
メグミ  
オオニタ  
カンドリ  
キョウコ  
カンドリ  
二人  
カンドリ

了解！  
私は大丈夫よ。たとえ一人になっても、最後まで戦い抜く。  
君って女は、どこまで逞しいんだ。  
つべこべ言っていないで、なかよく二人であの世へ行け！  
ここだ！ (と天井を指さす)  
死ね！  
ドキュン！ ドキュン！ ドキュン！ ドキュン！  
ドキュン！ (と倒れる)



オザキ  
キョウコ  
どう？ 当たった？  
お見事。

キョウコ・オザキ・スズキ・メグミ・オオニタが去る。  
反対側から、タカコが飛び出す。

タカコ  
姉さん、私とタブレットMはここよ。早く助けに来て！

そこへ、ブルーナイトが飛び出す。

ブルーナイト  
タカコ、よくやったわね。さあ、タブレットをこっちに渡して。

タカコ  
あんた、誰？  
バイオニック・キョウコよ。あんた、自分の姉さんの顔も覚えてないの？

ブルーナイト  
嘘よ。あんたは姉さんじゃない。

タカコ  
タカコ、姉さんをかろうと怒るわよ。

ブルーナイト  
あなたはブルーナイトだ。姉さんは、そんな派手な服、着ない。

ブルーナイト  
（自分の服を見て）しまった。着替えてくるのを忘れていた。ペリペリベ

リ！（と仮面を剥がす）

タカコ  
こっちに来ないで！

ブルーナイト  
やかましい！ こうなったら、実力でタブレットを奪い取ってやる。

タカコ  
姉さん！ 早く助けに来て！

違う場所に、メグミとオオニタが飛び出す。



キョウコ  
ブルーナイト  
キョウコ  
ブルーナイト  
キョウコ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ

おーっ！（と苦しむが、カゴを背負って玉を受け止める）  
その二。悪魔のサンマ焼き！ パタパタパタ。（とサンマを焼く）  
ゴホッ、ゴホゴホゴホッ。（とむせる）  
その三。地獄のお神輿！ それ、ワツシヨイ、ワツシヨイ！（と手を振る）  
おーっ！（とお神輿を担いで）重ーい！  
ダーリン、何とかしてよ。このままだと、バイオニツク・キョウコがやら  
れちゃう！  
そんなこと言われても、こんな展開になるなんて思ってなかったし。そう  
だ、これ！（とタブレットWを取り出す）  
アライグマ・タブレットね？  
こんなもの持ってても、何の役にも立たないか。  
大丈夫、立派な武器になるよ！  
えっ？  
（上に向かって）刑事さーん！  
（上に向かって）刑事さーん！  
（下に向かって）どうしたー！  
（下に向かって）どうしたー！  
（上に向かって）私の合図で、そのタブレットを――  
（上に向かって）私の合図で、そのタブレットを――  
（上に向かって）ブルナイトめがけて投げてください！  
（上に向かって）ブルナイトめがけて投げてください！  
（メグミに）何のために？  
ブルーナイトに、腋の下を開けさせるの。



キョウコ  
メグミ  
オザキ  
キョウコ  
ブルーナイト  
キョウコ  
ブルーナイト  
ブルーナイト  
六人

(戦いながら両腕で円を作る)  
今だ!(とタブレットを投げる)  
よし!(とタブレットを投げる)  
あーっ!(とタブレットを指さす)  
えっ? あーっ!(と両手を伸ばす)  
バイオニック・フィンガー! コチヨコチヨコチヨ!  
ワハ、ワハ、ワハワハハ! ピシ、ピシ、ピシピシピシ……。  
ドッカーン!

ブルーナイトが消える。

メグミ  
オザキ  
スズキ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ  
オオニタ  
メグミ

ダーリン!(とオオニタに抱きつく)  
(スズキに) 私たちも抱き合う?  
気持ちだけにしておきましょう。  
結局最後まで自分の見せ場が作れなかった。悔しいけど、完敗だ。  
完敗って、誰が誰に負けたの?  
作者が登場人物に負けたんだ。僕はこの物語の作者なんだよ。  
あ、そう。  
驚かないの?  
最初からおかしいと思ってたんだ。男はあなたしかいないし、三つの物語が鉢合わせになってもあんまり驚かなかつたし、それに……。  
それに?  
あなただけ、名前を言ってないでしょう?

オオニタ

僕の名前はオオニタアツシ。この名前は、原稿用紙の一枚目に書いてある。誰かが気づくかもしれないと思って、今まで隠してたんだ。

メグミ

それで私にダーリンと呼びせてたのね。

オオニタ

僕は僕自身を主人公にした物語を書きたかった。最初はただのサラリーマンだけど、最後は僕の大活躍で事件を解決するつもりだった。

メグミ

残念だけど、あなたはが大活躍しなくても、解決できちゃった。親はなくても子は育つ。作者はいなくても登場人物はガンバルの。

オオニタ

いや、この物語の作者は僕じゃない。

メグミ

えっ？

君たちだよ。君たちがこの物語を作ったんだ。

オオニタ

それは違う。君たちじゃなくて、僕たち。あなたを含めた、登場人物全員だよ。

オザキ

さあ、帰るか、OL。

オオニタ

どこへ？

メグミ

また誰かが、読み始めるかもしれないからね。どこへ帰るんだ？

決まってるでしょう。物語の始まりへ！

そこへ、ブルーナイト・カンドリ・シシド博士が飛び出す。

メグミ

それは――

キヨウコ

それは――

オザキ

それは――

八人

十月の、ある風の強い日のことだった！

オオニタを残して、全員が去る。

オザキが現れる。車に乗り、エンジンをかける。  
キョウコが現れる。バイクにまたがり、エンジンをかける。  
メグミが現れる。電車に乗り、吊り革に手をかける。

オザキ (勢いよくカーブを曲がる)  
キョウコ (勢いよくカーブを曲がる)  
メグミ (電車がカーブしてよろめく)  
オザキ (前の車を追い抜く)  
キョウコ (前の車を次々と追い抜いていく)  
メグミ (お尻を触られて怒る)  
オザキ (道路のデコボコでガタガタ揺れる)  
キョウコ (道路のデコボコでガタガタ揺れる)  
メグミ (電車を降りて歩き出す)  
オザキ (信号で急停車する)  
キョウコ (信号で急停車する)  
メグミ (自転車で急停車して走り出す)  
オザキ (イライラしている)  
キョウコ (イライラしている)



メグミ (二人を悠々と追いついていく)

オザキとキョウコが去る。メグミの自転車がオオニタに近づいてくる。オオニタがゆっくりと振り返る。新しい物語の始まりである。

∧ 幕 ∨